The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	聖ニコライの翻訳にかけた情熱 : 中井木菟麿の日記より
Author(s)	ダヴィド水口, 優明
Citation	懐徳堂研究. 2011, 2, p. 117-137
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24657
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「亜使徒聖ニコライ列聖40年記念祭」記念講演会報告

聖ニコライの翻訳にかけた情熱

― 中井木菟麿の日記より ―

ダヴィド水口優明

只今ご紹介にあずかりました水口でございます。私のような浅学非才な者がこのような高いところでしゃべるというのは不相応で非常に緊張しておりますけども、このような機会があたえられましたことを光栄に思いつつ、一生懸命お話しさせていただきたいと思います。

私がなぜここに立っているかというと、たまたま大阪教会管轄の司祭であるから、なのです。つまり、たまたま大阪大学図書館の懐徳堂文庫に所蔵されている中井木菟麿の日記を読むことのできる恵まれた環境にあったということ、また大阪教会には牛丸神父様がお集めになった貴重な資料がたくさん残っていて、たまたまそれを読むことができ、面白いことがたくさんわかるようになった、ということなんです。

今、私は「たまたま」という言葉を三回使いましたけども、神父が使う言葉としては非常によろしくありませんね。本当は「神様のお導き」と言わなければなりません。その「神様のお導き」によって、今日、ここでお話することになりました。よろしくお願いいたします。

懐徳堂の儒学者・中井木菟麿がなぜ正教徒となったか

『正教新報』第七百十七号に「中井先生懐旧談」と題して、中井先生の入信のきっかけが語られています。それによると、『儒教を信奉していた中井木菟麿だったが、それを越える「完全無欠の教義」をもつ教えがどこかにある筈と模索していた。そこへ友人から「正教会」を紹介され、「正教」の二文字にインスピレーションを受けて正教徒となった。中井師は、しかし、それを、自分が獲得したのではなく、すべて「神の導きによるもの」と

信仰告白している』ということわかります。これは「加美長彼得（ペトル）という当時『正教新報』を編集していた方が、中井師にインタビューして筆記したものですが、そこから一部引用してみます。

「所が或日、古林見蔵といふ人が尋ねてきて云ふには、『私はこの頃『正教』という宗教を聴いて居るがこれは同じ耶蘇教でも舊教でもなければ新教でもない開教の初から今日まで完全無欠の教義を継承して萬古不易なる宗門である故に之を『正教』と云ふのである。君如何じゃ試みに聴いてみては』と熱心に勧められた。その時自分は『正教』の二字が最も強く心線に響いてえも言はれぬ深い印象を受けた。殊に自分が多年渇望した、天下に是非なければならぬ完全無欠の教法と云ふので、俄に聴講の望が胸の中に湧いたばかりでなく、それと共に天下の完全な宗教はこれに相違ないと固く信じた。」

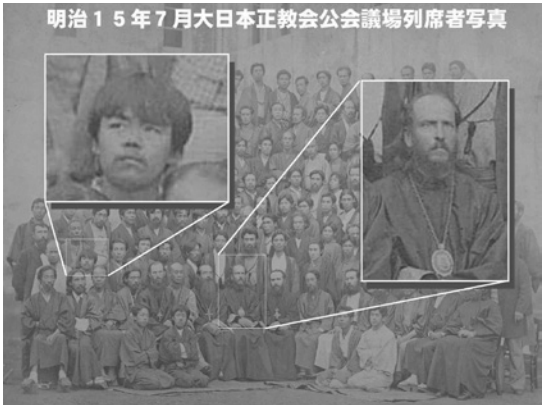
つまり中井先生がいうには「私は正教会というものが何たるものかを知らずに正教を信じた」ということです。ただ「正教」という二文字に、砕けた言い方ですが「ビビッと来た」というわけです。中井木菟麿師がこうして洗礼を受けたのは二十二歳の時でした。まだ若かったと思います。そしてすぐに副伝教者として、先程ポタポフさんもおっしゃったように、大阪、和歌山、加古川を伝教してまわっています。このころのことが牛丸神父様の『パウェル中井木菟麻呂小伝』に次のように書いてあります。

伝道に熱心だった中井木菟麿を招聘した聖ニコライ

「…多くのエピソードが伝道活動と共に残っている。例えば、伝道の講話が終わって夜遅く雨の中を帰途につく途中、番傘と小田原提灯をさげた彼に一人の労務者が近づき、待て待て！このタヌキ奴、よくも人をだまそうとしている。といって天秤棒をふりかざして殴打しようとしてきたという。俺は決してタヌキの化物ではない。石町正教会の伝教師であると中井は余裕シャクシャクと答え、難をのがれた。」〈中井先生は、タヌキに似ていたのでしょうか…〉「また、この時の人も信徒になったという類の話である。」〈聖ニコライに斬りかかろうとした澤辺琢磨が後に信徒となり神父になったという話とよく似ていますね〉中井は伝道に当り、かなりの熱弁をふるってはいろいろの災難、苦難に合ったといわれている。さらに明治十四年、イヤコフ高屋神父が上京の折、中井の動静をニコライに語った。早速ニコライは、公会後、

加古川に巡回にきた。…」（『パウェル中井木菟麻呂小伝』牛丸康夫著 昭和五十四年）

こうして先程ポタポフさんがお話されたように、ニコライによる招聘へと繋がるわけです。つまり、明治十五年に、中井木菟麿師はニコライのもとに行って翻訳事業を開始します。



写真①

ここに一枚の写真があります（**写真①**）。「明治十五年七月大日本正教会公会議場列席者写真」です。大阪教会の資料室に残っているものです。聖ニコライが最下段の真ん中にいます。この時、ニコライは四十六歳です。中井木菟麿師はどこにいるかというと向かって左手から二番目にいます。この時、二十七歳です。空を見上げ、口を堅く結んでいます。何か強い意志を感じます。タヌキに似ているかどうかわかりませんが…。

中井木菟麿の日記

さて、中井師は、膨大な量の日記を残しています（**資料①**）。明治十四年からの日記がありますが、日記にタイトルがつけられていまして、最初のものは「居諸録（きょしょろく）天楽楼置（てんがくろうち）」とあります。上京する前の伝道活動の記録ですが、実は漢文で書いてありまして、なかなか読むのは難しいです。明治十五年のタイトルも同じで、上京して翻訳を開始した頃の記録ですが、同じく漢文で書かれています。明治十七年の日記もあるのですが、実は、それ以降、約十年間の日記が不明です。日記をつけなかったのか、はたまたその間の日記の所在がわからないのか、どちらなのかわかりません。明治二十七年に手帳タイプのものがありますが、これは大阪教会の資料室にあります。

これは大阪大学所蔵の「居諸録」の写真です（**写真②**）。漢文で書かれたと言いましたが、やはりなかなか読めないですね。ただ「午後、主教と共に祭文を訳す」というの

は何とか読めます。他に「祭文翻訳」という言葉が毎日、記されています。日記にはこのように単純にただ翻訳をしたとだけ書いてあることが多いのですが、たまに詳しく翻訳の内容や苦労話が記されている時もあります。

この写真は『黄裳斎日記』で（写真③）、明治二十八年から三十三年まで、十一冊にも及ぶ日記です。

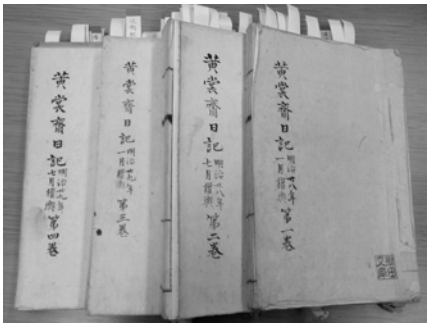
その後に『秋霧記』という日記がありまして、この時期の日記に、聖書および祈祷書の翻訳について非常に細かく記録がつけられています。中井木菟麿師は聖ニコライとの翻訳が終わった後、大

中井木菟麿の日記

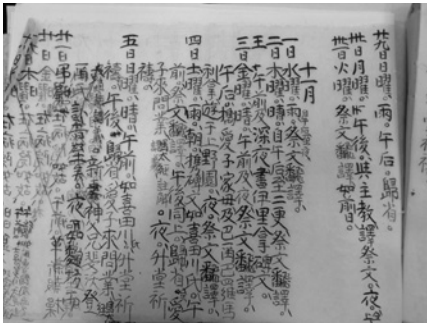
『居諸録　天楽楼置』１冊	明治１４年　＜上京する前の伝道活動の記録(漢文)＞	
『居諸録　天楽楼置』１冊	明治１５年　＜上京して翻訳を開始した頃の記録(漢文)＞	
『天楽楼　居諸録』１冊	明治１７年	
	明治１７年から約１０年間の日記不明	
※　**手帳**（タイトル無し）	明治２７年	聖書、祈祷書の翻訳の様子が詳細にわかる時期の日記
『黄裳斎日記』１１冊	明治２８年１月～明治３３年１月	
『秋霧記』６冊	明治３４年７月～明治３７年１月	
『秋霧記』９冊	明治３７年４月～明治４１年１月	
『秋霧記』１２冊	明治４１年１月～大正３年７月	
『鷦室記』１２冊	大正４年１月～大正９年	ニコライ永眠後、帰阪してから中井師永眠前までの日記
『呉江日録』８冊	大正１０年～大正１４年	
『弸中記』３冊	大正１４年～大正１５年	
『桜陵記』１３冊	大正１５年～昭和７年	
『桜谷記』１０冊	昭和７年～昭和１２年	
『薜荔窩記』４冊	昭和１２年～昭和１４年	
『後水哉館記』９冊	昭和１４年～昭和１８年	

※のみ大阪教会資料室蔵。他はすべて大阪大学付属図書館懐徳堂文庫所蔵

資料①



写真③

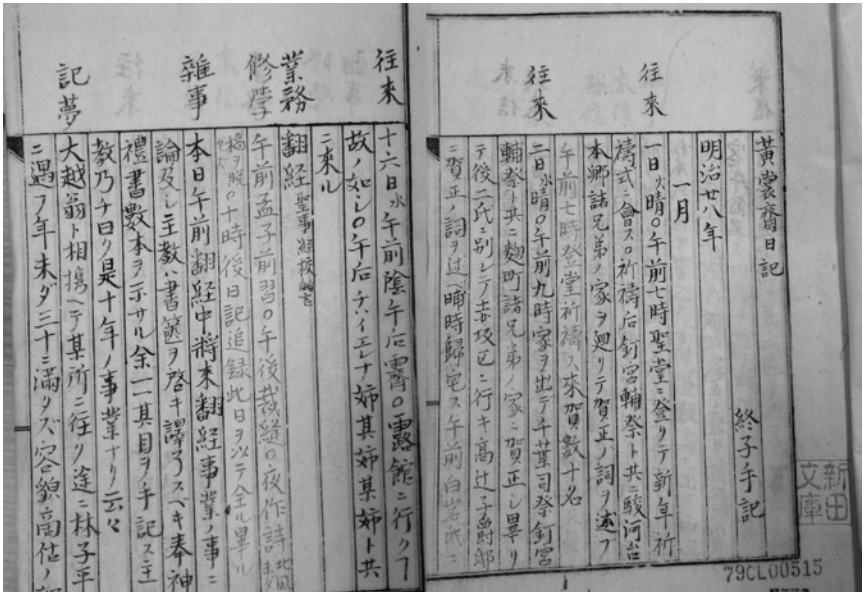


写真②

阪に帰ってきますが、その後もずっと永眠するまで日記はつづいています。しかしながら、今回、私たちが学ぶのは主に『黄裳斎日記』と『秋霧記』の二つの日記からです。

写真の右手下のあたりに「新田文庫」という印があります。大阪教会にマリナ新田和子さんという信者さんがいらっしゃったのですが、新田さんは中井木菟麿師の妹さんの中井終子さんの養女だった方です。その方が中井家の資料を受け継いでおられました。中井木菟麿師の日記は、一時期は大阪教会に保管されていたと聞きますが、その後、新田さんから大阪大学に献納されて、今、大阪大学の貴重資料とされているわけです。それで、献納者の名前がつけられ「新田文庫」と呼ばれています。

この写真は『黄裳斎日記』の一ページ目です（**写真④**）。最初に「終子手記」と書いてあります。中井木菟麿師と終子さんは異母兄妹なんですが、とても仲が良くて、日記も二人で共同でつけていた、ということです。恐らく木菟麿師がしゃべったことを終子さんが書き留めたのだと思われます。赤い文字で記されている文があります。例えば「午前　孟子前習」とあります。正教徒となった後でも、きちんと孟子を勉強していたのですね。「午後裁縫」とありますので、この赤い字の部分は、終子さ



写真④

んの日記、その他は、木菟麿師の日記ということがわかります。この中の「雑事」とあるところを読みます。

「本日、午前、翻経中、将来、翻訳事業の事に論及し、主教は、書筐を啓き、訳了すべき奉神礼書数本を示さる。余、一一其の目を手記す。主教、乃ち曰く、是、十年の事業なり云々。」

実際には十年以上かかっています。翻訳は聖ニコライが永眠するまで続けられます。

「新約」の翻訳

ポタポフさんの講演の中で、「新約聖書」の翻訳について聖ニコライの日記からお話をうかがいましたが、私も、中井木菟麿師の日記から、まとめてみました（資料②）。

明治二十八年九月二日に「本日より初めて新約聖書の翻訳の業に就く」とあり、明治二十九年一月二十七日に四福音の翻訳が完了し、同年十二月八日、新約の翻訳が終わります。しかし、これは「草稿」でありまして、すぐに「刪正（さんせい）」を始めています。「刪正」という言葉は、あまり聞いたことがないと思いますが、広辞苑をひくと「字句をけずり文を正すこと」とあります。

「新約」の翻訳から出版までの道のり

明治28年９月２日	「本日より初めて新約聖書の翻訳の業に就く」	1年3ヶ月
明治29年１月27日	「約翰福音完了」（四福音の翻訳完了）	
同　12月８日	「新約経の翻訳草稿、本日午前を以て全く終れり」	
	「之より刪正の業に就く」	
明治30年11月19日	「新約全書再刪を卒たり。	4年5ヶ月
	「本日、午前より訳字刪定の業に就く」	
明治32年12月１日	「この日より新約訳文刪正（三回目）の業に就く」	
明治33年６月25日	「新約経第三回刪成矣」	
明治33年９月	施点を付け始める	
同　11月29日	印刷屋に渡す	
明治34年４月７日	印刷校字の業　終る	
明治34年４月	『我が主イイスス・ハリストスの新約』発行	

資料②

今で言うなら「推敲を重ねる」ということだと思います。次に「訳字刪定の業に就く」とあります。「刪定（さんてい）」も、「刪正」とほぼ同じですが、「形を整える」という意味合いがあります。「訳字刪定」というのは、本当にこの字でいいのだろうか、この漢字で不都合はないか、などと吟味したということです。三回目の「刪正」を終えた後、明治三十三年には、「施点を付け始める」とあります。「施点」とは句読点のことです。「、」をつけ、「。」をつけることまで、細心の注意をはらったということです。句読点をテキトーにつけたのではない、ということがわかります。それで、印刷の校正が終わって、明治三十四年四月に『我が主イイスス・ハリストスの新約』が発行されました。

翻訳自体には約一年三ヶ月の時間をかけています。速いといえば速いです。しかし、それを吟味し推敲し「刪正」するのに、約四年五ヶ月もかかっています。こうやって訳された「新約」が、一九〇一年に発行されたのですが、亜使徒聖ニコライ列聖四〇年記念祭の「記念出版」として、今年、この「新約」初版本を復刻いたしました。表紙に「亜使徒聖ニコライ列聖四〇年記念」と銘が入っています。

翻訳に心血を注いだ聖ニコライ

先程、ポタポフさんから、新約聖書の翻訳がいかに大変だったかを学びましたが、私は、中井木菟麿師の日記から同じことをお話しようと思います。

「新約」の翻訳着手は驚くほど早かった

明治二十九年の日記に次のように書いてあります。

「今を去ること満二十八年前、主教は函館に於いて澤辺氏と共に新約聖書を翻訳してロマ書第八章すなわち今夕訳了せし所に至り、止むを得ざる事情のありし為、筆を絶れしと云う。よりて今夕、主教、余に謂いて曰く、二十八年前の緒餘、今に至りて之を続くを得たり。二十有八年間、真に一日の如し、と」（明治二十九年五月二十七日）

つまり、聖ニコライは、早い段階において、澤辺神父さんと一緒に、聖書翻訳にとりかかっているというところに注目したいと思います。「今から二十八年前」と言っています。つまり逆算すると明治二年です。聖ニコライが渡来し、「日本」を勉強し、澤辺神父様に洗礼を授けた直後です。本当に「すぐに」に新約聖書翻訳にとりか

かっているのです。そしてロマ書まで訳して行ったのです。すごいことだと思います。

一般の研究者たちは、「ニコライの聖書翻訳は甚だ出遅れた」と言っているのですが、私は、とんでもないまちがいだ、と思います。聖書翻訳は出遅れたどころか、先んじています。ただし、それを出版するのが遅くなっただけです。明治三十四年出版は、確かに他の諸教派よりは遅いです。世に出すのは遅かったとは思うんですけども、ものすごく早いうちに聖書翻訳には取り組んでいたのです。ただ自分で納得するほどの「質」ではなかったので、すぐには世に出さなかったわけです。翻訳が遅れたのではなく、「世に出す」のが遅れただけ、ということを強調したいと思います。

訳字の論議および翻訳の困難さ

次に訳字についての苦労が読みとれる日記を見たいと思います。

「朝、露館に行き、翻訳の務めに服し、奉事経の刪正に着手す。午前、希語エウロギソンの訳語を論じて未だ決せず。夜、露館にゆきて感謝祈祷式の校合をなす。エウロギソンの訳字に祝讃、祝福の字を兼用せんことを定む。」（明治二十七年九月三日）

これは、先程紹介しました大阪教会所蔵の手帳サイズの日記の中にあるものです。「露館」とは二人が翻訳室として使っていた部屋のある建物のことです。「奉事経」とは司祭たちが今も使用している聖体礼儀や晩祷にはかかせない祈祷書です。「希語」とはギリシャ語のことです。つまり、聖書だけではなく祈祷書を翻訳する時も、きちんとギリシャ語を見ているという所に注目したいと思います。単にスラブ語の祈祷書を機械的に翻訳したのではない、ということです。「論じて未だ決せず」とありますから、二人が意見を戦わせていることがわかります。

「アンゲルを神使、或いは天使と訳する事に付きては翻訳の業に就きし以来、未だ決する所あらず。全書中、或は神使とし、或は天使と改め、又神使と改めて頗る粉雑せり。」（明治三十年十一月二十二日）

「神使」という言葉がよいか、「天使」という言葉がよいか、相当悩んでいます。今、私たちも、「天使」と言ったり、「神使」と歌ったりしていますね。この日記は、明治三十年十一月のものですから、先程紹介した、新約の「訳字刪定」の時期に当たります。「アンゲル」というのはギリシャ語ですから、ギリシャ語の原本を見ているということがわかります。

「世および代の字を改め終わり、次ぎて聘の字、見る

の字、義人の字、欲の字、私、密、潜、隠の字、夢の字を定む」（明治三十年十一月二十一日）

これも新約の「訳字刪定」の時期にあたる日記ですが、「私」「密」「潜」「隠」はすべて「ひそか」と読みます。四つの漢字を使い分けています。本当にこの字でよいか吟味して決定した、ということです。

さらに、ポタポフさんも紹介されていたように、エフェス書の翻訳に大変苦労したことが中井木菟麿師の日記からもわかります。

「エフェス書の翻訳に就きてより以来、行文澁難にして之を翻する事、易からず。ニコライ師、之が為に苦心せらるる事、甚だし。…遂に曰く、余、此に於いて望みを失えり。…一たび望みを失うに於いては遂に之を継続する力なし。故に本日、業を息い、暫らくその心志を転じ、而して後、復、業に就くべし」（明治二十九年九月二十八日）

あまりにも翻訳するのが難しくて、一度仕事を中断して、心を整えなおさなければならないほどだった、ということがわかります。日記を調べると十月五日に再開しています。一週間ほど休んだことになりますが、このことからも莫大な精神力を注ぎながら翻訳に取り組んでいたことがうかがわれます。そして、できあがった「新約聖書」の翻訳について、さらなる吟味が行われます。

司祭等からの批判に答える

翻訳はただ二人だけで吟味したのではなく、他の司祭からの意見も聞きつつ行われました。

「新訳の新約中の文義並びに用字に付て笹川司祭、加納輔祭、奥山伝教者より書を以て意見を伝えられしが〈神父さんたちから、ここがおかしいのではという意見が出されたということ〉、今般、袖珍（しゅうちん）新約印行に付〈袖珍とはポケット版の意味〉、改正を要する所は之を改めんと欲し、今夜、翻訳前、主教に対して議する所あり〈必要なら改めようという姿勢をもって中井師と聖ニコライが論議したということ〉。主教は、グレチヤ原本〈ギリシャ語の新約聖書〉に就きて一々調査せられたれども、其の文義に関する者は原文と符合せること恰も写真の如く…改正の必要を認めず。只、マトフェイ七章十二節中、主客の用語〈主語と客語の使い方〉、不分明なりとの疑点は余も亦熟読して深く其の文義を誤れる事を遺憾とするに依り、遂に改正せざる可からざる事となり…。〈よく読んでみたら間違っていると気づき、改正することになった〉

〝凡ノコト人ノ爾等ニ行ハンヲ爾等欲スル者ハ爾等モ

亦斯クノ如ク之ヲ行ヘ〟と〝爾等〟の一主語を加ふべきかとの義も出でたれども〈この日本語には主語がないと指摘されたのでしょう〉、字句の煩はしきを感ずるのみならず、元、此の主語なくして有るが如くに解するべき所なれば〈もともとギリシャ語は、主語というものは無くても動詞の変化型で主語がわかるようになっている言語でして、この原文にも主語はありません〉、之を加ふるは正からず。依りて〝行ハント欲スル〟の〝ト〟を〝ヲ〟と改むる事となせり。猶、不分明なるを免れずと雖、文法に於いて誤を存せず。今般の再刊に付て改正せし所は此の一節のみ。…」（明治三十五年二月十六日）

ここで言われているように、一九〇一年の新約のマトフェイ七章十二節には〝凡ノコト人ノ爾等ニ行ハンヲ欲スル者ハ爾等モ亦斯クノ如ク之ヲ行ヘ〟とあります。「すべて人に自分が行って欲しいと思うことは、人にも同じように行いなさい」という意味の、所謂「黄金律」とも呼ばれる教えです。この中の「人ノ爾等ニ行ハンヲ」の「ヲ」を「ト」に改正したということです。確かに一九〇五年の宝座用「聖福音経」などでは「人ノ爾等ニ行ハント」となっています。「ト」であっても「ヲ」であっても現代の私たちには、あまりピンときませんが、しかし、このたった一文字について、一晩かけて論議しているのです。先程、一九〇一年の初版本をオフセットで再刊しましたといいましたが、本当は、この部分は「ヲ」じゃなくて「ト」に変えなければいけなかったのでしょうね。ここで今この話をお聞きになっている方々は、マトフェイ七章十二節の「ヲ」は「ト」なんだ、と思って読んでくださるようお願いいたします。

このように、「ト」か「ヲ」かという論議は、文法にかかわる問題なわけです。

文法書を読む中井木菟麿

「『奉事経』の文法につき取調べの為、図書館に行き午後五時帰る」と明治二十七年十一月十三日の日記にありますし、また、「文典文法書に就て翻訳せし語句を質す」（明治三十二年十二月二十五日）と書いている日記もあります。つまり、この日本語が日本語として正しいかということをきちんと調べているのです。日本人だから日本語ぐらいわかっていると高ぶるのではなく、ちゃんと正しい日本語でないといけないと、図書館にまで行って調べているわけです。このように、中井木菟麿という人は、向学心に溢れる人でした。さらに驚くべきことに彼はギリシャ語を学び始めます。しかも聖ニコライから教えてもらうのです。

中井木菟麿にギリシャ語を教える聖ニコライ

「余の希臘・羅甸の古典を学びて聖経の原文を窮めんと欲すること尚し〈中井師は、ギリシャ語やラテン語を学んで、聖書や奉神礼書の原文を自分でも極めたいとずっと思っていたということです〉。…聖書翻訳の業に就きし以来、重訳字義の明かならざる所に遇へば、主教、往々、原本を指示して、…如斯にして漸次に之を記すべし、と云はれしにより〈ニコライがギリシャ語を見てこれはどう訳せばよいか解らない、と頭を悩ませているわけです〉、余は之を学ぶ意あることを告げ〈一人で頭をひねっているニコライを見て、答えが出るまで待つのではなく、少しでも手助けしたいと思ったのでしょう、ギリシャ語修得の意志があることを告白しました〉、先ず其のアルファベット一二言を教示せられんことを請ひたるに其の文典につきてΑΒΓΔの四言に仮字を記して之を明日に至るまで記憶し来るべしと云はる…」（明治二十八年十二月九日）

この後、中井先生は、ずっとギリシャ語を勉強しつづけました。聖ニコライから教えてもらったことをベースに独学もしています。独学に限界を感じると有名なギリシャ語の先生のところに行ったりしています。でも、翻訳事業をしながら、そのかたわらニコライがギリシャ語を中井師に教えたというのはすごいことだと思います。どこにそんな時間があったのだろう、と私は不思議でたまりません。そのくらい熱心に二人は翻訳をしていたんですが、やはり休むことは必要でした。

翻訳の仕事を休んだ時

夏休みなどをとって翻訳を休んでいます。「夏期休業前の翻訳、之をもって終わりとなす。」（明治三十四年七月五日）と日記にあります。七月ごろから約一ヶ月半ほどの夏休みが毎年あったようです。これも日記からわかったことですが、面白いことにニコライは中井先生に夏休みの度に「おこづかい」をあげています。夏休みの間、中井先生は、大阪に帰ってきたり、京都に行ったり、修善寺に行ったりしています。その度に、ニコライは、これを使いなさいと懐からお金を差し出しています。中井先生は優遇されていた、言い換えれば聖ニコライは中井先生を大切にしていたということがわかります。

多忙の時は、もちろん休まざるを得ませんでした。「過日来、主教、会務繁忙の為、翻訳の業、息い…」（明治三十年四月四日）とあります。だいたい二月、三月が忙しかったようです。というのは、この時期は、会計報告をロシアに送らなければならなかったのです。年一回

の教会会計の決算期なわけです。今、私たちも五月すぎると決算報告を作るのに大変ですね。聖ニコライも決算書を作るのに大変だったのでしょう。この時期はしばらく翻訳を休んでいます。

ただし多忙であっても休まないこともありました。**「主教本日午前京都より帰館せらるるに依りて夕刻より翻訳を継続す」**（明治三十六年三月二十日）とあります。明治三十六年は、京都教会の聖堂成聖の年です。三月二十日とありますが、その成聖式の準備のために京都を訪れて、そして帰ってきた日ということです。今なら新幹線がありますから、さっと行ってさっと帰って来られるかもしれませんが、この頃は移動だけでも大変だったと思います。「午前」京都より帰ったということは、おそらく夜行列車に揺られて帰ってきたのだと思います。私だったら、ちょっと今日は疲れているから明日にしよう、と言うんじゃないかなと思います。しかし、もうその日の夕方から翻訳事業を始めているのです！　すごい情熱だな、と感じます。

病気の時も、やはり休みます。**「午前 祈祷書翻訳 午後 同上主教感冒臥榻因輟翻訳業」**とあります。これは明治十七年一月一日の日記ですから、漢文で書かれていまして、なかなか読めませんが、ニコライが「感冒」すなわちインフルエンザにかかって床に伏したので翻訳の事業は休んだという意味であることはわかりますね。

ただし休まずに早めに終わらせるのみのこともありました。**「三歌斎経翻訳の業に就く。…夜、例刻、本会に如く。但し、尼師、感冒し、入浴早寝せらるるにより八時、業を輟（や）む」**（明治四十年九月二日）とあります。「尼師」とは「ニコライ師」という意味です。風邪を引いたので早く風呂に入って寝なければならないので八時までで切り上げた、ということです。いつもは九時半まで翻訳するのですが、風邪で調子が悪いので、この日は一時間半はやく終わったわけです。調子が悪いのなら最初から休めばいいのに…、と私などは思いますが、しかし、少しでも前に進んでおこうと、翻訳の仕事に取り組んでいます。それだけ翻訳に情熱を注いでいたのです。

ニコライの永眠直前まで行われた翻訳業

実は聖ニコライが永眠する前後の中井木菟麿の日記がありません。中井先生は、聖ニコライの永眠時のことを日記に書き留めることができなかったということです。永眠の後、間もなくして日記を再開していますが、「今まで多忙のため書かなかった」と記しています。中井木菟麿師から見たニコライの永眠前後の記録というのを知

りたかったのですが、それはかなわず、非常に残念です。ただし、セルギイ主教さんが記している「大主教ニコライ永眠前後」という本からその様子がわかります。

「(二月一日)…そこで大主教は余に向かって『…私の書斎の中…に、花経の日本文の写本があります。悉く皆訳されているが、唯校合を終わらぬ。…中井さんに…直ちに此へ来るように云ってください…』。余は、中井さんを呼んで大主教の命を伝えた。中井さんは戦場の喇叭を聞いた軍馬の如くに喜んだ…。」

聖ニコライが病院に入院してからは翻訳の仕事は中断されていたわけです。中井先生の心は苦しかったと思います。しかし、翻訳を始めると聞いて、ものすごく喜び勇んでいる様子がこれでわかります。

「(二月三日)…中井氏は日本語訳を読み、大主教は別の手帳を見て中井氏の読む所と対照して居られた。…この時、丁度、至聖三者祭の晩課に読むべき祈祷文即ち永眠者の為の祈祷文を読まれてあった。やがて終わった。大主教は数回十字を描かれた。『ああ、おめでとう。やっと一仕事終わった。今、モー出版しても宜しい』と云ってパウェル中井氏を帰し、自分で日本文の訳書とスラウァン語の花経を縛られて、『貴下之を持って行ってください。中井さんは虚弱な人だ…』」(セルギイ府主教『大主教ニコライ師永眠前後』)

この時、「モー出版しても宜しい」と言った「花経」というのは、「五旬経」のことです。「五旬経」というのは、復活祭から五旬祭という祭の間(五旬節)に使われる祈祷書です。すでに「五旬経略」という本は作られていました。五旬節の中の土日のみの祈祷文を集めたものです。そうではなく、平日のものも含めたすべての祈祷文、いうなれば「五旬経全」が完成したわけです。ところが、この訳了した筈の「五旬経」が印刷されないまま、今日に至っています。今となってはこの時の原稿がどこにあるのか不明です。もはや関東大震災で消滅してしまったのか、どこかの書庫に眠っているのか。もしこれが発見されたら大発見だと思います。死の直前でやっと完成した翻訳が印刷されず世に出ないままであるというのは、本当に悲しいことです。

聖ニコライが永眠したのは二月十六日のことです。その十三日前まで翻訳に心血を注いでいたのです。聖ニコライが日本に来てから、永眠するまでの間、何をしたのかというと、「翻訳」をしつづけた、と言えると思います。

中井木菟麿の日記に記された ニコライの言葉

これから紹介するのは、恐らくみなさん始めて耳にする聖ニコライの言葉だと思います。実は、これが今日、私がここで話したかったことなのです。

翻訳された経典は子供（子孫）である

「…主教は、又、此の翻訳事業の神聖なるを称して曰く、吾子（ごし）〈あなた、という意味、つまり聖ニコライが中井先生に向かって「あなた」と言っている〉の祖先は書を著して後に伝えられしと雖〈中井先生の先祖はたくさん本を書き残したけれども〉、猶、是れ人世区々の事業たるに過ぎず〈この世のものに過ぎない〉。吾子に至りて神より此の聖業を命ぜらる。其の栄、父祖に過ぐること甚し遠し〈神様に命じられた聖なる事業なのだから、先祖を超える仕事をしているのだ〉。且つ吾子、娶らずして子孫を嗣がしむべきなし〈中井先生は、一生独身だったので子供がありませんでした〉。然れども、この聖業は、必ず吾子の功績として後世に伝はるべし。故に、吾子は其の訳する所の経典を以て己の子孫となすべし〈翻訳した経典はあなたの子供なのだ〉、云々」（明治二十八年三月十九日）

私は、この日記を読んだ時に、聖ニコライも、主教であり修道士であり、結婚はしていない、だから子孫はない、つまり聖ニコライも同じ気持ちをもっていて、それで中井先生に、翻訳した経典は子供である、と言ったのではないか、と感じました。翻訳された経典はみな聖ニコライの子供であるとも言っていいと思います。変な言い方かもしれませんが、聖ニコライと中井木菟麿師の間に生まれた子供です。

こうして生み出された翻訳経典は、何も教会内部のものだけではない、と聖ニコライは思っていました。

懐徳堂記念会と翻訳された奉神礼書

「大阪の懐徳堂仮記念室に諸遺物を陳列することとなりたらば、余は為に吾子の労したる奉神礼書一切を美装してその室内に置き、子孫の業務を表彰することを為すべし」（明治四十三年九月三十日）

聖ニコライは正教会の奉神礼書を懐徳堂記念室に陳列して中井先生の業績を顕彰したいと言ったということです。明治四十三年（一九一〇年）に「懐徳堂記念会」が発足しました。それから一〇〇年たった今年、先程、湯

浅先生がおっしゃられたように「懐徳堂記念会一〇〇周年」を迎えたわけです。明治四十四年四月には、大阪府立図書館に「懐徳堂記念室」が設置されました。果たして、この懐徳堂記念会が各資料を納めた「懐徳堂記念室」に、正教会の奉神礼書、中井先生と聖ニコライが生み出した子供たちが並べられたかどうかは、わからないそうです。島根大学の竹田先生によると、これは実現しなかったのではないか、ということです。けれども私は、ほんの少しの間でも陳列されてあったらいいのになぁと思っています。

「奉神礼書一切を美装してその室内に置き」とありますが、これらが聖ニコライと中井師が翻訳し出版した正教会の奉神礼書です（写真⑤）。右手側から宝座用福音経、使徒経、聖詠経、時課経、連接歌集、聖事経、奉事経、八調経、祭日経、三歌斎経、大斎第一週奉事式略、受難週奉事式略、五旬経略です。もし展示されていたらこんな感じで並んでいたのでしょうか。

経典翻訳が聖業であることを諭すニコライ

「本日より八調経翻訳の業に就く〈「八調経」というのは、一週間を一単位として「一調」「二調」「三調」と進んでいき、八週間たったらまた「一調」にもどるという祈祷のサイクルがあるのですが、そのサイクルに関する祈祷文を集めたものです〉…訳するに臨みて曰く、我等の業務は最も尊重すべき聖業に属す。是れ、日本に正教会を聖定すべき要素を具ふるものなり〈この「八調経」の翻訳は、正教会を日本に根付かせるために絶対的に必要なものである〉。吾が正教会の奉事は、他の旧新諸派の如きに非ずして、一語一言悉く重要なる教会の定理を含蓄

写真⑤

せり〈正教会の祈祷文の一つ一つは教会の定理、教えを含んでいます〉。此の故に、祈祷式完全に成就せば、不易の定理、従いて堅立すべきものなり。凡その信徒は聖堂に登りて奉事に参祷せし間に於いて定理教訓を解得して自ら信徳に進む。平常多業にして教義を研究する余暇を得ざるものと雖、祈祷中に教示せらるる所によりて、神言を味ひ、定理を研究するに至るものとす〈一般の信徒は、通常、仕事で忙しくて教義を研究する時間はないかもしれないが、祈祷に参祷することによって神の言葉を味わい、定理も学ぶことができる、つまり祈祷中に信徒は正教会の勉強が出来る、聞いている祈祷文をよく吟味すれば、正教会が何たるものなのかがわかってくる、ということです〉。而して我等は此の事業に就く。慎重にして事に従わざるべからず。此の業は思ふに、二年を費やすべし。之を畢へて後は、四旬斎の奉事式、月課経、諸祈祷式等あり。最後を旧約とす。旧約の業、成る日は、年、正に八十に及ばんとす。是に於いて、逝世の期も俄に至らん、云々。〈この聖なる八調経を訳した後、残りの奉神礼書を訳して、最後に旧約聖書を訳す予定だけども、その時はすでに八十歳になっているだろう。死期も近いかもしれない、とニコライは語っています。実際、ニコライは八十を超えず、七十六歳で永眠してしまいます。残念ながら旧約までは着手できませんでした〉。夜間の翻訳中にも亦、曰く、今日は大いに記憶すべき日なり、と〈午前中だけでなく、夜の翻訳作業の時にも、今日は記念すべき聖なる日だと強調した〉。蓋、八調経の業に就くを以てなり。夜、九時半、家に帰りて後、山茶花（さざんか）一株を購えり〈山茶花を買ってきたということですが、よく夜九時半すぎに植木屋さんが開いていたものだと思います〉。蓋、八調経始業の日を記せんと欲するにあり。」（明治三十七年十月二十五日）

聖ニコライに言われて「そうか、今日は聖なる記念日なんだ」と思って夜わざわざ出かけていって山茶花を買ってきて植えた、つまり記念植樹したわけです。中井先生は、何か堅い信念があって、何事も動じない、堅い人物、というイメージがあるのですが、その一方、非常に素直な方だったのかなと感じます。今日は「記憶すべき日だ」と言われたら、「そうなんだ」と素直に受け入れて行動を起こす人だったのです。

だから私たちは、八調経を読む時に、単にサラサラ読んではいけないと思います。これだけの情熱をもって訳したのだということを知りつつ読まなければならないと思います。

では、本当に、八調経を読んで「定理教訓を解得」で

きるでしょうか。例えば、次の祈祷文を読んでみましょう。八調経の第七調の火曜日の晩課の祈祷文です。

「ハリストスよ、昔、樹は我を楽園より逐い出せり、今、爾、釘せられしに、木は我を楽園に升せたり。」

わかる人はピンとくる筈です。わからない人は何を言っているのかわからないかもしれません。少し解説します。この中の「楽園」というのは、「エデンの園」のことです。では、この「我を」とは誰のことかというと、「アダム」です。「樹」は何を意味するかというと、「禁断の樹」です。神様が食べてはならないと言った筈の樹の実を食べてしまった、つまり罪を犯した結果、アダムとエワは、エデンの園に居られなくなって「逐い出され」ました。

二行目の「爾、釘せられし」とは、つまり「ハリストスが十字架につけられた」という意味です。ということは、この「木」は、「十字架」のことですね。そして「楽園」は今度は「天国」を意味しています。「升（のぼ）せたり」とは、天国に引き上げたということですから、罪が赦されて天国に入れられる、ということを表しています。

こうして見ると、「なるほど！」と「定理教訓を解得」できるのではないかと思います。

さらに言うならば、一行目の「我」は、アダムでしたが、二行目の「我」とは一体誰のことでしょう。そう、この「我」は、これを読み、聞いている「私たち一人一人」です。ということは、一行目の「我」も、もはやアダムではなく「私たち一人一人」を意味しています。私たちは、今も、「楽園（エデンの園）」の外にいて、罪深い世の中で生きています。しかし、ハリストスを信じることによって、罪がゆるされ、神の国（楽園）に入ることができるのです。「アダム」というのは固有名詞ではなく、一般名詞、つまり「人間」「人類」という意味をもった言葉で正教では使用されます。

さらにもう一つ、一行目の「樹（き）」は、「樹木」の「樹」という漢字が使われています。これは生えている木だからです。二行目の「木（き）」は、「材木」の「木」ですね。十字架は材木で作られていました。こういう風に漢字を使い分けています。恐らく原語ギリシャ語では同じ言葉だと思いますが、漢字でその違いを表しているのです。このあたりは中井先生のテクニックだと思います。

実際にはこれを早口で読んでしまいますので、耳で聞いて聞き流してしまいがちですが、祈祷書を持って漢字を見ながら、誦経者が読んでいる祈祷文、聖歌隊が歌っている聖歌の言葉を、目と耳で確かめると、聖ニコライ

と中井木菟麿が訳した正教会の祈祷文の重要さが味わえます。

死と翻訳

「夜、…語談〈翻訳の手を休めて雑談していたら〉、生死のことに及ぶ〈実は、この一日前に聖ニコライがインフルエンザにかかり、岡崎という医者にこの病は三日罹ると生命が危ないと言われたことが日記に書いてありました。そして「もし私が死んだらあなたの子供たちを世に出しなさい」つまり、必ずあなたの手で完成させて印刷しなさい、とニコライは中井先生に言っています〉。予曰く〈中井師がニコライに向かって言うには〉、既得の祈祷書類完成して印行せられざる間は、死期、必ず至らざらるなりと〈「主教さま、大丈夫です。翻訳してきたこれらの祈祷書が完成して印刷されない前に、主教さまが死ぬことは決してありません」と励ましたのでしょう〉。尼師曰く、予も亦、是くの如くならんを願ふ。其れ、吾が為に之を祈れ、と〈「私もそのように願っている。私のために祈って欲しい」と聖ニコライは言った〉。」（明治四十一年十二月一日）

しかし、この言葉を言った三年二ヶ月後、明治四十五年二月十六日に、聖ニコライは永眠します。しかし、これで話は終わりません。聖ニコライが永眠した後についてもふれておかなければなりません。

永眠後、中井木菟麿の夢に現れた聖ニコライ

「夢に、大主教、墓中より復生して、健在せらるること常の如し〈聖ニコライが元気な姿で中井先生の夢に現れた〉。予を召して云く、五旬経中に数葉を挿むべきことを忘れたり。吾、之を挿入し置かずば、何人か之を能せん。之を挿入せずして印行せば、用いるもの、祈祷の次第を誤る、と。其の状、真に逼れり〈五旬経の中で挿入しなければない数ページが残っている、私しかそれを挿入することができない、と必死に訴えた〉。蓋、実にこの挿入すべき数葉ありしなり〈実際に挿入し忘れたページがあった〉。已に挿入せしや否やを記せず。精査して印に付せざるべからず〈すでにそれらを挿入したかどうか記録がないので、もう一度確認してから印刷にまわさなければならない〉。大主教遷逝の後、其の健在の状を夢みしこと、之を合せて四次に及べり。」（明治四十五年三月七日）

三月七日という日付を見ると、聖ニコライが永眠してから、まだ一ヶ月たってない間に、四回も、中井先生は聖ニコライの夢を見たわけです。これからわかることは、

聖ニコライは死ぬまで翻訳をしていたのではなく、死んだ後も翻訳事業を続けていた、ということです！

まとめ

今日は、亜使徒聖ニコライ列聖四〇年記念の講演として「聖ニコライの翻訳にかけた情熱〜中井木菟麿の日記より」とタイトルをつけてお話してきました。今まで見てきましたように、本当に情熱をかけて聖ニコライと中井木菟麿師は翻訳に取り組んでいました。しかし、私としては実は「情熱」という言葉は、あまりしっくりきていません。もっと別の言葉がないかなと思ったのですが、他にいい言葉が出てきませんでした。本当は「熱き心」と言ったほうがよかったかもしれません。翻訳された聖書・祈祷書には、「熱き心」が込められています。しかし、これは、単にニコライという個人がもっていた「熱さ」ではありません。今も、聖ニコライをとおして私たちに与えられる神・聖神の「温熱」です。「信の温熱」です。

翻訳というのは、単に言葉を別の言葉に移し替えるということではなく、「正教」という「聖なる教え」を伝えることのできる「聖なる言葉」を生むということなのだと思います。私たちは、二人が生みだしたこれらの子供たちを大切に守り育てていくべきだと思います。守り育てるとはどういう意味か、というと、私たちがそれを味わい、自分の生命の、信仰の「糧にする」ということであり、かつそれを多くの人々に伝える、ということです。このすばらしい神の教えを伝える、ということが、私たちのこれからの課題だと思います。

以上が、今日、私が講演会の中で話したかったことで、譬えるとメインディッシュが終わったという感じです。これからデザートとコーヒーを召し上がっていただきましょう。二枚の写真を用意しましたので、ご覧下さい。

一枚目は、聖ニコライと中井木菟麿師が立って並んでいる有名なツーショット写真です（写真⑥）。この写真撮影のことが日記に書いてありました。

「山下姉〈山下りんのこと〉が揮毫〈絵を描くという意味〉を了えられたる主の復活並びに昇天の聖像、本日を以て撮影するに付〈山下りんが描き上げたイコンを写真撮影した時〉、主教も序を以て半身全身の二版を影写せられしが〈ついでにニコライの姿を撮影した〉、亦、余に勧めて、二人並立の写真を作らしめたり〈「中井さん、あなたも一緒に撮りましょう」と言ったのでしょう〉。是れ、永く二人翻経の記念となるべし。今や、翻経の業務、五旬経を畢へて〈草稿が完了したということ〉、今

タより祭日月課経の訳に就かんとする。」（明治三十五年十一月二十日）

すごい背の高さの違いですね。聖ニコライの身長が何センチあったかご存知の方はいらっしゃるでしょうか？

私は知らないのですが…。中井先生の身長は何センチあったのでしょう。私は知りません…。もしかしたら一五〇センチくらいかなと思われますが…。（計算すると、この時、聖ニコライは六十八歳、中井木菟麿師は四十七歳です。）

写真⑥

写真⑦

二枚目は、翻訳をしている最中に撮られた写真です（**写真⑦**）。二人が並んで座って机にむかっている様子が撮影されています。よく見ると中井先生は、座布団を三枚くらい（?）重ねて座っているのがわかりますね。翻訳業に精力を傾ける聖ニコライと中井木菟麿師です。

（今回、中井木菟麿の日記を読むにあたっていろいろとお知恵をお授けくださった島根大学の竹田健二教授、日記閲覧のためにおはからいくださった懐徳堂センターの福田一也氏、井上了氏、ならびに大阪大学図書館の方々、そしてこの講演会を開くにあたり大変お世話になりました湯浅邦弘教授に、心より感謝申し上げます。）